

被災地を結ぶ、伝える活動

伝承ロード 縁

えにし

記憶と記録 後世につなぐ

東日本大震災・原子力災害伝承館

宮城県「やまもと語りべの会」

宮古市立田老第一中学校

寄稿 自転車で巡る第1分類

「南三陸ホテル観洋」おかみの阿部さん

市民と共に乗り越えた複合災害 福島県相馬市

気仙沼大島ウエルカム・ターミナル

気仙沼・道の駅「大谷海岸」

台湾を対象にした「3・11伝承ロード」のプロモーション事業

奇跡の一本松(陸前高田市)





施設は地上3階建て。屋上のテラスからは整備が進む復興祈念公園や海が見渡せる

記憶と記録 後世につなぐ

東日本大震災・原子力災害伝承館

未曾有の複合災害を経験した福島県の記憶と記録を保存し、防災・減災への教訓として未来へつなぐ「東日本大震災・原子力災害伝承館」。展示や語り部の講話を通して震災の風化を防ぎ、後世へ伝えていく。

東京電力福島第一原子力発電所から直線距離で約4キロの双葉町中野地区に一昨年9月にオープンした。原子力災害を中心とした資料を収集・保全し、一般向けの展示や専門的な研究・研修を行うことで、震災の風化防止と情報発信を目的としている。

現在、双葉町の大部分は帰還困難区域となっている。同区域の一部に、再び人が住めるよう先行的にインフラ整備が進む「特定復興再生拠点区域」では今年6月以降の住民帰還開始を目指している。同館がある中野地区は比較的線量の低い旧避難指示解除準備区域で、一昨年3月に避難指示が解除された。

周辺には復興祈念公園の他、企業を誘致するための産業団地の造成などが進み、多くの工事車両が行き交う。

館内は7面大型スクリーンを使ったプロローグシアターの他、「災害の始まり」から「復興への挑戦」まで五つのカテゴリーに分かれている。震災前の平穏な日常から地震と津波、続く原子力発電所事故の発生・事故後、そして現在に至るまでの経過を時系列でたどる構成だ。

被災者が語る証言映像や災害の爪痕を残す数々の遺物、写真パネルや模型などを通じ、当時町民が置かれた状況を体感できる。展示エリアには解説員数人が常駐し、来館者の質問に応じている。

毎日4回、震災と原発事故を経験した地域住民による語り部講話を開催。各40分ほどの講話で、個人の体験から震災の教訓、町の復興状況、未来への思いなどが語られる。

語り部の中には20代前半の若手数人が在籍。津波が来た時の恐怖や原発事故によって避難を余儀なくされた自らの経験を、子どもの目線はどう感じたか率直に伝えている。

エントランスでは「震災遺構 浪江町立請戸小学校」の開館に合わせ、「浪江町展 浪江町の

学校と震災」と題した展示を開催している。

請戸地区の空撮動画や写真、請戸小の黒板に残されていた自衛隊のメッセージ、震災後に閉校した九つの町立学校の歴史資料などが並ぶ。震災当時、請戸小の音楽室にあり、津波による流失を免れたグラウンドピアノも展示されている。浪江町展は観覧無料だ。

「震災遺構 浪江町立請戸小学校」は同館からも校舎が見える。震災の脅威を改めて思い出す場として、併せて訪れてみたい。

開館は午前9時～午後5時（最終入館午後4時30分）。入館料は一般600円、小中高生300円、未就学児無料。火曜、年末年始は休館。連絡先0240(23)4402。



物が発する思いに耳傾ける

震災・原子力災害伝承館の瀬戸さん



「実物資料の収集は難しい面もあるが、やりがいを感じる」と瀬戸さん

津波で折れ曲がったガードレールから仮設住宅の管理人が書き残したメモまで、東日本大震災・原子力災害伝承館では170点余りの実物資料を展示している。人がいなくなった場所に取り残されたそれらのものは、私たちに当たり前の日常が、ある日突然消えてしまう怖さを語りかけてくる。

実物資料の収集と調査、管理を担うのが学芸員の瀬戸真之さん(45)。今までに集めた

瀬戸さんは埼玉県出身。前職は福島大教員で地理学を専門としていた。2017年、福島県から大学へ実物資料を収集する依頼があり、歴史や社会学を専門とする教員ら10人ほどで双葉地域を中心とする被災地に入ったのが、現在の仕事に就くきっかけになった。

収集を始めて間もない頃に訪れた、ある小学校の光景が今も脳裏に焼き付いているという。

「震災から6年経過していたが、教科書やランドセルは教室に置かれたまま。今にも子どもたちの笑い声が聞こえて

きそうだった」当初は淡々と作業に当たっていたが、やがて一つ一つのものに宿る思いについて考えるようになった。

「収集物には2種類ある。一つは被害を受けた痕跡が目に見えて分かるもの。もう一つは震災前の歴史や文化を伝えるもの。

前者は災害の脅威を伝える点でインパクトがあるが、失われた町の姿を記憶する資料は、町民の皆さんにとってかけがえのないもの」と強調する。

町の変化を記録

避難解除の方針が出された

双葉町では、古い建物の取り壊しが進められ、震災当時を物語るものが確実に失われている。「後世に震災の教訓とし

て残るのなら」と、家を取り壊す前に収集を依頼する町民もいる。

瀬戸さんは同館のオープン時から、町が変化していく様子を定点カメラで日々記録してきた。「今後、町は目に見えて変わっていく。その過程を記録することも大事な仕事」と話す。

館内の展示物や説明ボードに記載されている文言は、来館者アンケートや外部からの声なども参考に、随時変更している。

「展示を見て『こんな悲惨なことがあった』で終わらせず、自分事に捉えてほしい。一人一人が防災について真剣に考える場になれば」

より伝わりやすい展示を指し、瀬戸さんは日々、試行錯誤を続けている。



展示物について解説する瀬戸さん



地元の中学生が書いた習字と、津波で流出した学生かばん

思いを
((発信))

地域と防災を学び震災伝承

宮城県「やまもと語りべの会」

宮城県山元町の「やまもと語りべの会」は、一昨年9月に一般公開が始まった「山元町震災遺構 中浜小学校」を拠点に、町内の被災地をフィールドにしたガイド活動に取り組んでいる。町外からの来訪者はもちろん町民にも震災伝承のみならず、古里の良さや防災知識を伝えることが活動のポイントだ。



お話を伺った方
会長の渡辺修次さん

山元町には観光協会のようなガイド活動に適し、かつ下支えする組織がなかった。町内の各種団体のメンバーや町民有志が震災の語り部を行っていたが、基本的な事柄が統一されないまま個別の活動が続いた。

町全域を包括した組織として「やまもと語りべの会」は2013年11月に発足。被災時の体験や思いを語ることは

メンバー個々の意思を尊重しつつ、データや客観的情報など基本事項は統一を図った。

震災伝承はもちろん、沿岸部の記憶、古里の自然や歴史、山元町の素晴らしさを町内外に発信し、後世に残すことが活動の目的だ。発足以来、渡辺修次さん(70)が会長を務める。

コロナ禍の現在、主に活動するのは約15人。メンバーの中には埼玉県の人もいて、コロナ禍前は定期的に通っていた。もともと山元町に何回か足を運び、語り部ガイドを聞いているうち、自身が案内できるまで覚えたという。



「山元町震災遺構 中浜小学校」の北側ではためく黄色いハンカチ

メンバーの中で最年少の中学3年生から20代までの7人は防災士の資格を持っている。渡辺さんは町内の山下中学校長在職時に震災に遭い、生徒4人を失った。若者に今後の震災伝承を託す上でも防災・減災の学習は大切という熱い思いがある。

会は任意組織のままだが、できるだけ自主財源の確保に努めている。主な収益はガイド料。備品購入や若者の防災士資格取得の全額助成などに充てている。

昨年3月11日の新聞報道で、被災3県の若年層が震災時の記憶があってもそれを家庭で自らは話さない人が約4割、親世代も子どもに伝えない人が3割を超える調査結果が出た。震災の記憶の風化が懸念されるからこそ、会では若者の育成に力を入れ、町内のジュニアリーダーの防災士資格取得を協力する考え。

山元町は1933年の昭和三陸地震津波にも遭った。「私はその事実を知らなかった」と町内出

身は渡辺さん。「自分たちの町の歴史や地形を学び、繰り返しされる被災で得た教訓を記憶にとどめ、実践し、伝えることが次の被害を最小限に食い止めるすべになるのでは」と語る。

「山元町震災遺構 中浜小学校」の北側。ポールの頂上から地面に向けて張られたロープに、無数の黄色いハンカチがはためく。会が取り組む「黄色いハンカチ」プロジェクトだ。ハンカチには来訪者の思いや伝えたいこと、縁・絆にちなんだメッセージが記されている。「こうした思いを全国に広げたい」。渡辺さんはきょうも空を見上げる。



旧山下駅跡の山元町慰霊施設「大地の塔」を案内する渡辺さん



「田老を語り伝える会」の活動に取り組む田老一中の生徒たち

先人の思いを胸に伝承活動

宮古市立田老第一中学校

明治三陸地震、昭和三陸地震、そして東日本大震災と、幾度となく津波の被害に見舞われてきた宮古市田老地区。地域特有の歴史を背景に、田老第一中学校（照井正孝校長、生徒58人）では、震災前から防災教育に熱心に取り組んできた。震災後は生徒たちが被害や教訓を忘れず、世界から寄せられた支援に感謝し、伝承活動に取り組んでいる。

「防浪堤を仰ぎみよ 試練の津波幾たびぞ 乗りこえたてしわが郷土 父祖の偉業や跡つがん」

田老一中の校歌3番の歌詞には、津波の被害を何度も乗り越えてきた古里の先人を称え、その精神を未来へ受け継ぐ思いが込められている。田老地区は総延長2.5km、海面からの高さ10mの巨大な防潮堤があることで知られていた。震災時は津波が防潮堤を超え、堤体そのものを破壊。同校は校舎1階が浸水した。

田老一中では入学直後からの復興教育に力を入れ、その校

内拠点として2012年、震災資料展示室「ボイジャー」を開設した。生徒たちの震災の風化を防ぎ、田老の出身者として伝承してもらおう狙いもある。震災直後の写真や、子どもたちの震災からの歩み、田老に関する新聞記事などが数多く展示されている。在校生は折りに触れて展示室を活用し、防災学習で訪問した他校の生徒らにも開放している。

各地の中学生と交流

2015年には校庭の一角に「田老一中の碑」が建立された。碑には「防浪堤 あつても逃げ



他中学校の生徒の前で堂々と発表

ろ 高台へ 津波が来たらでんでんこ」と刻まれている。当時の在校生が考えた一文だ。生徒たちは交流型の語り部活動として「田老を語り伝える会」に取り組んでいる。これまでも岩手県内陸部や首都圏などの中学校との交流の場で、田老地区の震災時の様子や思いなどを発表してきた。

会によって違いはあるが、事前にまとめたプレゼンテーションに沿って、生徒全員による被災状況の説明や代表生徒の体験作文発表、小グループに分かれての意見交換、合唱交流などを行っている。

震災の記憶を風化させないため、自分たちの学びを伝えつつ、震災についての意見交換や生活文化の違いに触れ、お互いに防災に対する意識を高め合っている。やがて訪れる次の災害から一人一人の命を守るべく、教訓や防災のすべを共に考え、伝え、広げている。

寄稿 自転車で巡る第1分類

歴史を超えた情報共有

石碑など第1分類の震災伝承施設を八戸市からいわき市まで自転車で巡った男性がいる。神戸市の森脇裕さん(51)。阪神・淡路大震災の伝承に携わる仕事の傍ら、自転車を利用した社会貢献活動にも取り組んでいる。多くの仲間を支えられて乗り切った第1分類巡りの足跡を振り返ってもらった。



宮古市浄土ヶ浜の日の出風景は早期出走のご褒美

震災遺構をつなぐ 壮大な計画に触発

2019年秋、名古屋で開催された防災国体の災害ミュージアムセッション。3・11伝承ロードの発表で広大な地図がスクリーンに映し出された。東北4県にまたがる広大なエリアの中、それぞれの地域で伝えていくことの難しさに日々向き合っている伝承施設が、手を取り合っている防災力の向上を目指すという壮大な構想に触発され、「全部訪れてみたい」と思ったのが、私の自転車巡りのきっかけだった。

阪神・淡路大震災の経験から防災・減災の大切さを伝える業務に15年ほど携わる中、27年前に交通網が断絶された神戸でのボランティア活動では、



森脇 裕(Yutaka MORIWAKI)さん
ランドナープラスプロジェクト代表
兵庫県「人と防災未来センター」で阪神・淡路大震災を伝える業務に携わる。世界各国の長距離サイクリングブルベに参加する実績もある。

自転車移動が何よりも役立つ記憶が今でも残っている。

乗り換えなどがある公共交通機関より、「ドアトゥードアでは自転車の方が速い」と国内外どこに行くときにも自転車を带同するちよつと変わった日常。この大好きな自転車での活動が社会貢献につながらないかと、サイクリスト仲間と共に自転車活動団体「ランドナープラスプロジェクト」を立ち上げたところでもあった。

震災伝承NW協議会によって登録されている震災伝承施設は三つに分類されている。そして、この数字が大きくなるほどミュージアムのような多くの方に分かりやすい展示



第1分類巡りを走破した愛用の自転車

施設に分類される半面、第1分類は昔からの石碑や看板と
いうように、とても大切だが
訪れるには困難な場所にある
のが特徴だ。

昨年7月時点での登録数は
150カ所。「第1分類は数が
多く、実際に完全に把握でき
ていないのが現状なんです」と
と3・11伝承ロード事務局長
の原田吉信さん。「機動力のあ
る自転車での調査が最適」と私
は走ることを決めた。

IT駆使し情報共有 何よりの財産に

まずはどのように訪問した
らよいかというルートづくり。



第1分類に登録されているのは中央の津波石碑「昭和八年津浪記念碑」(久慈市宇部町)。右の東日本大震災大津波記念碑は今後登録されるかもしれない

石碑は小さなオブジェクトな
のでピンポイントの情報があ
り、事前にストリートビュー
で目標物を確認しながら予定
ルートを引くのだが、意外に
分らないものが多い。

つないだルートは八戸から
いわきまで約1100キロ程度。
東北の風景は出張などで被災
地に自転車で行ったとき、ど
んどん変わっていく経験から、
この震災10年のタイミングの
映像を残すことには意味があ
ると道中ビデオを回すこと
したので、いつもの夜間走行
は禁止。現地の間違ひなく迷
うことも想定し、設定期間は
1週間にした。



道中の全行程をスマホでYouTubeライブ配信

時はコロナ禍。1度目の挑
戦は間隙を縫って出発地の青
森に着いたら、全国的な大寒
波で大雪のため走行を断念。
2度目は直前に発令された緊
急事態宣言で延期。3度目の
正直とスタート地点に立てた
のは2021年11月11日だつ
た。

しかし、このコロナ禍によ
るとも大きなメリットも
あった。仕事で得た技術的な
知識を駆使し、記録映像は
Zoomで外部の方と接続。
それをYouTubeで配信
する方法を導入し、現地のオ
ンボード映像を見ながら会話
を共有できたのは何よりの財

産だったと思う。

先達への思いはせつ 今を丁寧生きていく

冬至に近づくこの時期、
「鬼滅の刃」ではないが、走れ
る時間は朝6時から夕方4時
までの10時間前後だ。私より
も早起きで、配信基地局を担っ
てくれた矢田博之さんは視聴
いた多くの方が少しでも見やす
いようにと神戸から全行程の
ホスト作業を行ってくれた。

現地からは地元で復興に携
わった方やサイクリスト仲間、
3・11伝承ロードの事務局の
方。地域を研究している大学
の先生、支援活動に携わった



オンラインを駆使し、仲間や関係者と情報共有

メディア関係の方やミュージ
シャン。メンバー内では遠く
は海外からの接続も含め、タ
イミングはばらばらながらも
総勢23人の方々とオンライン
で現地映像を共有した。

実際に走ると、事前に調べ
ていた石碑などが所々ごっそ
りと移動し、迷子になること
も。近くの住民の方に聞いて
も、日常で遺構に関係した生
活を送っているわけでもなく、
「分からない」という人も多い。
Zoomからは「衛星写真を
見たら、もう少し行った所に
赤い鳥居があるから、その辺
じゃない?」「ニュースを検
索したら国道の反対側へ集落
自体が移転していますよ」など
と、現場とオンラインを巻き
込んだ宝探しのようなシーン
が多々あった。

道中も復興の話や何うなど、
最もに残ったのは現地やオ
ンラインの垣根を越え、全く
異なったバックグラウンドを
持つ人々が、日常生活ではな
かなか体験できない、自然災
害の歴史に触れる時間を共有
できたこと。

防災・減災は、ともすれば
伝えることの難しさを実感さ
せてくれる。今回のミッシヨ
ンは自転車やオンライン通信

景色に溶け込むように道端に
たたまむ石碑を発見



などの複合的な要素が加わり、
一風変わった伝承手段の可能
性を感じることができた。

近年、災害伝承についての
大切さが見直されつつあり、
2019年、13年ぶりに新し
く「自然災害伝承碑」の地図記
号ができた。「大切な人が亡く
なった事実を決して無駄にし
ない」との思いを後世に残すこ
とで、「少しでも子孫の悲しみ
をなくしたい」という歴史を超
えたメッセージが石碑などに
込められていると思う。
実際に訪れてみると、大自
然の中で深く先達へ思いをは
せつつ、今を丁寧に生きる道
筋を見つけることができるの
ではないだろうか。

記憶を残す
明日のために

語り部バス 学びの場に

「南三陸ホテル観洋」おかみの阿部さん

宮城県南三陸町にあり、雄大な志津川湾を望む「南三陸ホテル観洋」。創業者のチリ地震津波の被災経験を基に、高台の固い岩盤の上にある。震災後は避難者やボランティアら最大1000人ほどを受け入れ、避難所の機能を果たした。2011年夏には、町の沿岸部を巡りながら被災体験を伝える「語り部バス」の運行を開始。これまでの利用者は延べ42万人以上を数える。



ホテルが保存する民間震災遺構「高野会館」を見学する語り部バスの乗客

津波で町の姿は一変。当時の公の避難所ではなかったものの、ホテルは建物の損壊がほとんどなく、多くの住民の避難を受け入れた。おかみの阿部憲子さん(59)は自身も被災者ながら「皆さんを守らなくては、支えなくては、の一心だった」と振り返る。

「ホテルが稼働することで精肉店、鮮魚店、生花店、さまざまな商店に結び付く。震災以降、人口が一気に減少する中、交流人口の担い手である宿泊産業の私たちが頑張ろうと奮い立った」

鉄骨だけが残った旧防災対策庁舎など、南三陸町の生々しい津波の傷跡は大きく報道され、直後から訪れる人は多かった。団体宿泊客の要望で、スタッフが「道案内」としてバスに乗り込み、震災前の様子を語っていた。より多くの人に伝えることが重要だと、宿泊客向けに「語り部バス」の活動

を始めた。乗客がたと

え1人でも運行する。

震災からしばらくの間、被災地は観光や旅行のキーワード「わくわく感」「楽しみ」が失われてしまった。その代わり、被災地での出来事を見聞きしてもらおうと、新しいキーワード「学び」につながった。

こうで生きていく

津波が押し寄せた跡を見た参加者は一様に声を失う。阿部さんは修学旅行で来た子どもたちに講演する機会があった。子どもたちは旅行後、進んでリーダーシップを取った。不登校だったのが学校に行くようになったりと、行動に変化があったという。

「甚大な被害を見て、それでもなお地域の人が前に進む様子を心を動かされたのかもしれない」とほほ笑む。

「震災時はお客さまの中間東の方もいた。人は移動する。

いつ、どこで自分が被災するのかわからない。住んでいる場所だけの問題ではない。小さい頃から家庭や地域で防災教育に取り組む必要性を説く。

震災から11年。町内の道路は整備され、震災遺構の解体が進む。さら地で説明しても伝わらないもどかしさを感じるようになった。自社で二つの民間震災遺構を所有する一方、「震災遺構というもののわぬ語り部は重要だが、全てを残せるわけではない。それぞれの立場でどう行動していくのか考える時期が来た」と話す。

「私たちはご先祖さまから、バトンをつないでここまで生きていく」と力を込める。南三陸町で話を聞いた人たちが第2の語り部となり、震災伝承を、バトンを次世代につないでいくことを願い、きょうも伝承活動にまい進する。



ホテルが避難所として機能していた頃の住民の様子を捉えた写真を紹介する阿部さん

支え合いの心を原動力に

市民と共に乗り越えた複合災害 福島県相馬市



観光客でにぎわう「相馬復興市民市場 浜の駅 松川浦」

震災翌日、自身が生まれ育った原釜地区の変わり果てた景色に言葉を失ったという立谷秀清市長(70)。未曾有の事態の中で地域再建へ向けた行動プランを作り、まちづくりの指針を定めた。インフラ整備がほぼ一段落した今、市民の支え合いの心を力に相馬市創生の歩みを進める。



お話を伺った方
立谷秀清市長

地震、津波、原発事故という危機的な複合災害に立ち向かった相馬市。震災直後に掲げたまちづくりの指針は「各世

代における被災者の人生設計を可能にする」。具体的には「子どもたちの健やかな未来」「青年には安全な居住環境と安定した雇用」「高齢者が安心して暮らせる老後」を実現することを使命に取り組んできた。

震災翌年に開設した「相馬井戸端長屋」は、「孤独死を出さない」との思いで整備した高齢者向け集合住宅。各戸にトイレ、浴室、キッチンはあるが、洗濯機を置く場所はあえて設けていない。昔の長屋が井戸を共有したように、ランドリールームを設けて入居者が自然と顔を合わせ、声を掛け合えるように配慮した。

1日1回は食堂に集まり同じ食事を味わい、共有スペースの掃除も共同で行うなど、入居者同士が支え合って暮らすことで引きこもりや孤独死を防止する。

さらに相馬市が整備した災害公営住宅325棟のうち



馬場野山田地区に2棟、磯部地区・原釜地区・細田東地区に各1棟整備した「相馬井戸端長屋」

316棟はアパートではなく一戸建てだ。家を失った人の多くは沿岸の原釜、尾浜、磯部地区で長年暮らしてきた住民だ。「アパートでは落ち着かないだろう」と昔ながらの切り妻屋根の和風住宅を整備した。

安全証明し風評払拭

将来の生活再建に役立ててもらおうと相馬市は被災自治体としてはいち早く、希望する入居者に土地ごと住居を払い下げる方針も示した。

この11年間で生活インフラの復旧は、ほぼ完了。今後は引き続き、風評対策や被災者の心のケア、震災遺児・孤児

のサポート、交流人口の拡大といったソフト面の課題に取り組む必要がある。

カレイやヒラメなど年間を通して多くの魚介類を水揚げしてきた松川浦漁港は、原発事故の影響で操業自粛を余儀なくされた。9年間の試験操業を経て、昨年4月ようやく本格操業を見据えた拡大操業へ移行した。

水揚げした魚は放射能検査装置を使って自主検査を行う。科学的に影響がないわずかな値でも検知・測定されれば風評につながる懸念があり、今後も風評払拭に向けて知恵を絞っていかねばならない。

一昨年10月には「相馬復興市民市場 浜の駅 松川浦」がオープン。昨年9月までのおよそ1年間で延べ21万人が来場し、相馬市の観光業はもとより産業・商業面でも後押ししている。

「相馬市の復興がここまで進んできたのも、復興事業に関係したあらゆる人と、何より市民の協力があってこそ成し得たこと。人は一人では生きられない。相馬市が誇る支え合いの心が、今後のまちづくりの原動力になる」と立谷市長は前を向く。

土産に最適 地場産品 ユズの加工品が好評

気仙沼大島ウエルカム・ターミナル

気仙沼市本土と気仙沼大島大橋でつながる大島は紺碧こんぺきの海に囲まれた離島。三陸復興国立公園にあり、亀山や景勝地の龍舞崎など見どころが点在する。一昨年に誕生した「気仙沼大島ウエルカム・ターミナル」は地場産品を扱う販売スペースと、休憩ができる多目的スペースやテラスを備える観光・交流拠点だ。

ターミナルは大島観光の玄関口・浦の浜にある。車は三陸沿岸道路を利用する場合、仙台方面からなら浦島大島インターチェンジ（I.C）、大船渡方面からなら気仙沼鹿折I.Cで降りると便利だ。両I.Cとも出入り方向が限定されたハイウェイのため、乗り降りに注意しよう。

販売スペースでは土産品の他、大島産を中心とする農水産加工品や生鮮食品、手工芸品など地場産品も扱っている。出品しているのは一昨年に発足した気仙沼大島地場産品出荷・販売組合の組合員。地元の漁業・



販売スペースで人気商品を手に持つスタッフの皆さん

農業の生産者が多くを占める。民宿のおかみ手作りの商品もある。蒸したカキやムール貝、皿貝、塩蔵ワカメ、野菜、コメなどが並び、特産のユズを使つたゆず茶やこししょう、みそも好評だ。

海岸に打ち上げられたシーグラスや貝殻、流木を用いたアクセサリー、木工小物も充実。売れ筋商品の一つ「ピン玉ストラップ」はガラス玉や漁具の浮きを材料に、漁師が網を編む技術を生かして仕上げている。気仙沼市観光キャラクター「海の子ホヤぼーや」関連グッズも多彩。

浦の浜湾を一望

多目的スペースは無料WiFiワイファイを完備し、椅子とテーブルを用意。隣接するテラスとともに、今年秋ごろまでNHK連続テレビ小説「おかえりモネ」の登場人物のパネルなどを展示している。テラスの目の前に広がる穏やかな浦の浜湾も必見。大島の恵まれた自然を実感できるはず。

施設には気仙沼大島観光協会の事務所も入り、観光パンフレットを用意している。

運営する気仙沼市産業戦略課は「販売スペースには海のものやユズ、ツバキを使った大島ならではの商品がそろい土産にもお勧め。観光協会のスタッフに島の見どころなど気軽に聞いてほしい」とPRする。

連絡先 0226(28)9253。

第2分類

第1分類のうち、公共交通機関等の利便性が高い、近隣に有料または無料の駐車場があるなど、来訪者が訪問しやすい施設。

- 早馬神社 津波到達点 復興祈願碑
気仙沼市唐桑町宿浦75
- 岩井崎龍の松 気仙沼市波路上岩井崎1-1
- 東日本大震災杉ノ下遺族会 慰霊碑
気仙沼市波路上杉ノ下地内

第3分類

第2分類のうち、案内員の配置や語り部活動など、来訪者の理解しやすさに配慮している施設。

- 唐桑半島ビジターセンター・津波体験館 気仙沼市唐桑町崎浜4-3
- リアス・アーク美術館「東日本大震災の記録と津波の災害史」常設展示
気仙沼市赤岩牧沢138-5
- 気仙沼市 東日本大震災遺構・伝承館 気仙沼市波路上瀬向9-1
- 気仙沼市復興祈念公園 気仙沼市陣山264

出入り口では「海の子ホヤぼーや」が
出迎えてくれる





新装オープン1周年 多くの観光客が来訪

気仙沼・道の駅「大谷海岸」

気仙沼市の道の駅「大谷海岸」は、震災から10年の節目となる昨年3月の新装オープンから1周年を迎える。津波で甚大な被害に遭い、仮設店舗で営業を開始。4度の引越しを経て、ようやく開業した常設店舗だ。気仙沼観光の玄関として多くの観光客が立ち寄っている。

道の駅「大谷海岸」は三陸沿岸道路・大谷海岸インターチェンジから車で1、2分の国道45号沿いにある。大谷海岸を望む風光明媚な場所、新しい施設は外観も館内も気仙沼の顔にふさわしい装いだ。

施設のコンセプトは「オール気仙沼」。もともとは旧本吉町時代の1995年に直売所としてオープンし、その翌年に道の駅の認定を受けた。その後の合併で気仙沼市となったが、市唯一の道の駅ながら、観光や物販の面で市内を網羅しているとは言いがたかった。新施設では気仙沼全体の道の駅という位置付けを打ち出

すとともに、取れたての魚介類の販売、ここでなければ味わえないメニューや買えない商品を用意するなど、独自性を明確にしている。

気仙沼ならではの食

産直市場の鮮魚コーナーには魚や貝、ホヤの水槽がある。港の鮮魚店のような雰囲気。都市部からの観光客に好評だ。



朝から買い物客が立ち寄る産直市場の物販コーナー

他にも旬の新鮮な魚介類はもちろん、野菜や果物が豊富にそろう。地のものを使った手作りの弁当やおにぎりといった加工品をはじめ、気仙沼とその周辺の土産も充実。道の駅のオリジナルグッズも販売している。

カフェテリア「umico」では「季節の海鮮丼」「気仙沼極上バラ寿司」「ふかひれ姿煮ラーメン」など、地場産食材をたっぷり使ったメニューがずらり。店内やテラス席では、目の前に広がる大谷の海を眺めながら食事が楽しめる。ファーストフード「はまカフェ」でもオリジナルの「サメかつバーガー」や、蜂蜜漬けのフカヒレの食感がたまらない「ふかひれソフト」などを販売している。

1階には観光情報コーナーや、震災前に同駅の水槽で飼っていた魚やマンボウをプロジェクションマッピングで上映するアクアリウムトンネルもある。2階は大谷海岸を見晴らせる展望デッキだ。

小野寺正道駅長(65)は「訪れたお客さまが常に新鮮な感動に出合えるよう進化させていくので、何度も気軽に足を運んでほしい」と呼び掛けている。

連絡先 0226(44)3180。

\\ 気仙沼市内の震災伝承施設 \\ 東日本大震災から得られた実情と教訓を伝承する施設で、第1~3分類に該当する施設。

第1分類

下記の項目のいずれか一つ以上に該当する施設。

- ① 災害の教訓が理解できるもの
- ② 災害時の防災に貢献できるもの
- ③ 災害の恐怖や自然の畏怖(いふ)を理解できるもの
- ④ 災害における歴史的・学術的価値があるもの
- ⑤ その他、災害の実情や教訓の伝承と認められるもの

- 神の倉の津波石 気仙沼市唐桑町神の倉
- 津波石碑(昭和8年3月3日 大震嘯災記念) 気仙沼市唐桑町竹の袖(賀茂神社境内)
- 津波石碑(大震嘯災記念) 気仙沼市三ノ浜(鶴ヶ浦)(県道大島浪板線脇)
- 津波石碑(大震嘯災記念) 気仙沼市二ノ浜(梶ヶ浦)(県道大島浪板線脇)
- 津波石碑(大震嘯災記念) 気仙沼市浪板(吉田鉄鋼所前、個人宅地内)
- 命のらせん階段(旧阿部家住宅) 気仙沼市内の脇2-133-1
- 震災伝承看板「津波を受けても落ちなかった橋(二十一浜橋)」 気仙沼市本吉町二十一浜(二十一浜橋)

台湾を対象にした「3.11伝承ロード」のプロモーション事業

～台湾メディアを招請したファミトリップ*を紹介～

*ファミトリップ(FAMトリップ)とは、観光地の誘致促進のため、ターゲットとする国・地域の旅行事業者やプロガー、メディアなどに現地を視察してもらうツアー

3.11伝承ロード推進機構では、東北運輸局の補助事業として2020年度から「台湾を対象にした『3.11伝承ロード』のプロモーション事業」を実施している。21年度は台湾メディア4社を招請し、福島と宮城の震災伝承施設や観光施設を紹介した。

昨年12月1～4日に行われ、JR郡山駅を出発。福島県内は高柴デコ屋敷、コミュタン福島、ワンダーファーム、スパリゾートハワイアンズ、いわき震災伝承みらい館、東日本大震災・原子力災害伝承館、とみおかアーカイブ・ミュージアムなどを見学し、相馬市の復興状況も視察した。宮城県内は山元町震災遺構・中浜小学校、南三陸町震災復興祈念公園とさんさん商店街、みやぎ東日本大震災津波伝承館などを一巡し、途中で語り部バスツアーや海に見える命の森での植樹体験も行い、JR仙台駅で解散した。



東日本大震災・原子力災害伝承館



相馬市伝承鎮魂祈念館

各スポットでの参加者の反応など

- 【高柴デコ屋敷】台湾の人気俳優の(故)小鬼さんが、かつてこの場所で三春駒の絵付け体験をしたストーリーを話題にできる。
- 【コミュタン福島】放射能について子どもでも分かりやすい展示で、とても勉強になる。
- 【東日本大震災・原子力災害伝承館】(発電所の展示物や映像を見て)もっと時間をかけて見学したい。
- 【とみおかアーカイブ・ミュージアム】原発事故による街からの避難映像に心を打たれた。
- 【相馬市】台湾の義援金で建てられた相馬井戸端長屋を視察。
- 【山元町】山元町震災遺構・中浜小学校での90人の命を守った学校のストーリーに耳を傾けた。
- 【南三陸町】台湾からの義援金で再建された南三陸病院を視察。
- 【石巻市】石巻市長との意見交換会を実施。市長と一緒に食べた釜飯がとてもおいしいと高評価だった。

表紙

被災地を歩く



高田松原の証し

奇跡の一本松(陸前高田市)

あの日の被災地。春まだ遠く、地域によっては雪がちらついた。這いつくばるように迫ってきた津波が、幾度も沿岸部を襲った。残された光景を目にして涙を拭い、春はもうやって来ないと思った。

陸前高田市の高田松原は震災前、広田湾に面して緩やかな弓状の約2*にわたり、7万本ほどの松林が広がる景勝地だった。あの日、津波は松林を根こそぎなぎ倒し、のみ込んだ。砂浜も津波や地盤沈下でほとんどが失われた。震災後は生き延びた木が数本あったというが、壊滅した海岸の西側に残った「奇跡の一本松」は、まるで高田松原の証しとなることを運命づけられていたかのようだ。

しかし生育へのダメージは大きく、生きたままの状態は無理だった。専門家の手による保存作業を経て、高田松原津波復興

祈念公園のモニュメントとして残されている。

公園には東日本大震災津波伝承館や道の駅高田松原などがあり、各地から震災・防災学習の生徒も訪れる。奇跡の一本松に足を運び「思っていたより高いね」「この1本だけが残ったの?」などと口にしながら、まぶしそうに見上げる。

青春の思い出に、ここで見た海を、一本松を、伝承館で学んだことを忘れず、後世にもつなげてほしい。

あの日から11年を迎える。冬の寒さ厳しい東北にも、必ず春は巡ってくる。



所在地
陸前高田市気仙町字土手影180
(高田松原津波復興祈念公園)